

横芝の碑

(その五十九)

立合の昔を語る二つの石祠

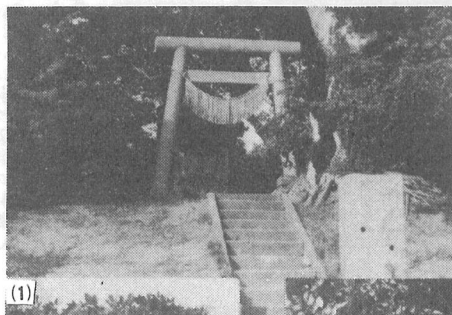
屋形立合地区の氏神様は、地区の里人が天王様と呼んでいる八坂神社です。

神社の境内には二つの石の祠が建っていて、一つには大六天王宮文化八末二月吉日、立合講中、と刻まれ、いま一つには、金比羅大権現、願主立合実川重藏、岸中林勤助、寛政十一末四月之建、と刻まれています。

大六天様は、天照大神の御子を祭ったもの、という説と、大國主の尊の御子を祭ったもの、という二説がありますが、天照大神の御子、という説の方が多様です。しかし、広辞苑等により「大六天とは、欲界六天（色、形、威儀姿態、言声、細滑、人相）の最高所、この天に生れた者は他の樂を自由に自己の樂に化転することが出来る。他化自在天とも呼ぶ云々」とありますが、八坂神社の祭神が、神話に出て来る天照大神の弟といわれる素盞鳴尊（すさのおのみこと）であること等から、やはり、八坂神社の境内に祭られている大六天様は、天照大神の御子というのが素直な解釈だと思います。大六天王宮の祠について

ては里の人々から之と言ったお話は聞けませんでした。金比羅大権現の祠については、こんな話を聞かせてくれました。

昔、この辺りは、もつと入江になった砂浜続きに田圃や畑が広がっていて、十数軒の人家が点在していました。海



写真(1)氏神様の全景

写真(2)昔のこうを語りかけてくれそうな二つの祠

した。何と言っても平端な土地ですから、高汐や津波が起ると、砂丘を越えた海水は忽ちの中に人家の庭先から田畑まで押寄せ、辺り一面は大海原同様になってしまっ

からは沢山の魚や貝類が漁れ、鰯等は殆んど田や畑の肥料にしていました。ですから田や畑の土地も肥え、米麦や野菜等もよく出来る本場に平和な農漁村でした。そうした村にも、大変心配なことがありました。それは海が荒れることです。一度海が荒れ出すと大変で

波位では此こまで水に浸りませんでした。それに、天王様は、由緒ある四所神社の分霊としてお祭りした、里人にとっては靈験新かと思われている氏神様でしたから、雲行きが峻しくなってきた、と思うと里の代表が境内に立寄って、砂防作業や避難の方法等を相談したり、一同を避難させた後も此こに残り、其後の処理作業に立合ったりもしたのです。立合の地名は、この境内から起ったといわれています。

のでしたから、里の人々は海の守護神である金比羅様を信仰することとは大変なものでした。若し奇特な人が現れますと、遙々と讃岐（香川県）の金比羅様まで参詣に出かけて海の平穏と豊漁を祈ったものでした。里の人々は、その話を聞くと、「自分には到底出かけることが出来ないからせめて代りに」と、幾何かの淨財を持ち寄って一緒の祈願を頼んだりしました。これは次第に代参という形になって後世に残ったのですが、現在の様に交通機関も発達していなかった頃のこと、江戸（東京）の人が伊勢（三重県）参りに出かけるのにも水盃を出かけた、という頃のことです。随分大変な訳ですが、此こに建っている金比羅様の祠は寛政十一年（一七九九）、今から一七八年前に林勤助さんと実川重藏さんという奇特な人が、無事に金比羅詣でを果して、何ヶ月振りで故郷に帰ったのを記念し、戴いて来た御符を納め、村中の海難防除と豊漁、無病息災祈願の為、氏神様の境内をお借りして建立したものののです。昔から此の辺りには郷土が土着して農漁業を営んでいた者が多く、里人の中で指導的な立場にあった、といわれています。

郷土か庄屋さんの様な地位に居た人でしょう。以上の様なお話でした。

立合の村外れ、農道を前にして数段の石段を備えて建っている鳥居が氏神の八坂神社です。境内には一見数百の樹齢を想像させる老樹が生い繁り、その根張りは境内所狭しと跋扈して、さながら押寄せる浪頭を思わせます。これを除ける様な形で佇むように建っている二つの石の祠は、丁度浪頭を見つめながら話し合う昔の人の様にも見え、また、昔のことを話しかけてくれそうにも見えるのでした。

写真(1)は氏神様の全景です。が境内いっぱいには覆い被っている様子や織建での向うに見える根張りの剛々しさや大きく口を開けた洞窟にも樹齢の深さが忍ばれます。そして、僅か十段の石段の上の鳥居が随分高く見えるのが印象的です。写真(2)は二つの石祠で、向うに見える屋根造りの祠が里人に昔の話を伝える金比羅大権現で手前の無蓋の祠が大六天王宮です。里人には忘れられているようですが、天王様の境内で天王宮と刻まれていること等から、案外秘めた物語りを持っているのかもしれない。

（本稿取材に当り、地元の渡辺勲夫氏、同祥祠氏、林武夫氏の御指導と御協力を戴きました。）

（小沢春光氏寄稿）